一枚の奇跡

天照朱雀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
一枚の奇跡

【Ｎコード】
Ｎ００６３Ｈ

【作者名】
天照朱雀

【あらすじ】
ある日の帰り道、俺は不思議な金属片？を偶然拾う。・・・ああ後悔しか言葉がない。あの時から微妙に俺の日常がずれてしまったんだろうな・・・。

邂逅

関数のグラフのXの変域がどうとかこうとか・・・。やばい、ぜんぜん頭にはいってこない。やはり7時間授業を受けた後でさらに3時間の塾通いは無理があるんじゃないだろうか。もっともそうなっている原因は自分にあるわけで、もう少しまともな成績を維持していれば、この疲労を3分の1程度まで下げれるように思うのだが、なかなか厳しいものがある。現にこうして授業の内容は睡魔にほとんどシャットダウンされ、ぎりぎりでまぶたが睡魔に負けまいとがんばっている最中だ。ああ、やばい。意識が・・・。なんてことを考えていると周りのやつらが立ち始めた。どうやら授業は終わったようだ。

助かった。

どうにかしなきゃだめだよな、この現状・・・。俺はバッグにノート類とふでばこを流し込むとコートを羽織って歩き出した。教室をでるともう暖房の効力もなくなるようで、冷たい空気が肌をさす。うう、寒い。季節はもうすっかり秋から冬へとたすきをわたしてしまったようだ。塾をでると風もあってより一層寒く感じた。「は～。」息が白い。空はもう真っ暗でところどころに星の光が小さく見えた。時間はもう10時すぎ、当然のことだ。

いつもと同じこと。何もかわることなどない。しかたがないだろう？現実なんてそんなものだ。駅に向かう足もいつもと同じで重たいしな。くつの地面を擦る音とすれ違う車のライトがやけに目につく。俺は走り出した。駅はそんなに遠くないし、体をあったためるにはちょうどいいだろう。ほら、もう見えてきた。特徴ある赤い時計台。あれが駅の目印だ。ひとごみをかきわける。こういうときは逆にいってる人が多く感じるよな。そのときだった。駅へと続く階段の隅のほう、ちいさな光るものが目にとまった。手にとるとそれはよく

あるトレーディングカードなんかと同じ様なサイズの板だった。金属のようなものでつるつるしていて、駅のライトを白く反射していた。俺は考えた。小さいころはよく親父に、ものは拾うな。って怒られたっけな。俺はそれをコートのポケットにいれた。いいだろう、このくらい。たまには何か収穫があっても。１枚の金属板への俺の小さな好奇心がそういっていた。

日曜というものは本当にいい。その週がどんなに忙しくてもちゃんと俺を休ませてくれる。そんなわけで今日は特に予定もなく、のんびりと過ごせたのだ。午前中をゆっくり家で過ごして、午後は友人と近くの本屋にでも行って・・・みたいな、なんともまあ、といった感じに休日を満喫して今に至る。

「ありがとうございました～。またおこしくださいませ～！」

店員さんの、はつらつとしたあいさつを聞いて、俺たちは本屋をあとにした。腕にはまっているデジタル時計は５：３０を示している。駅に行って家まで１０分ってとこかな・・・。明日も学校だし、早めにきりあげよう。俺たちは街に向かう。日はもうだいぶ傾いていて薄暗くなっている。

「じゃあな、上野。明日は遅刻すんなよ。」

「おう、ってなんだよそりゃ。じゃあなっ。」

そんな感じで上野と別れて俺は駅にあしを進めた。

あれ、上野に貸した本返してもらったけ・・・そのときだった。いきなり突風がきた。

「うわっ」

風は木の葉を巻き上げながら通り過ぎていった。閑散としている路地がより一層すさんで見えた。俺は再び歩き始めた・・・　ゴスッ

痛っ！ふいに俺は額をぶつけて後退した。

「つあっなにが！」

何に当たったのかを確認しようとして、俺は疑問に思った。歩いていたのは歩道の真ん中辺り。なにもそこに妨げとなるものはないし、

第一俺は前を向いていた。俺はゆっくりと手を前にだした。バシッ！手が弾かれた。これは、壁？目の前を塞いでいる見えないもの。

！　俺ははっとした。もっとはやく気づくべきだった。なんと言えばいいのだろう？違和感？いつからだ？上野と別れてから・・・いや、もっと前か？何かがおかしい。いつのまにか周りがまるで夜中のように暗くシンとしていた。いや、というよりまったく音が聞こえないしとても駅前の様子とは思えない。

「なにがどうなって・・。」

「自分の心に聞いてみれば？」

俺はバッと振り返った。いきなり声をかけられたのだ。そこには一人の人影。コートのようなものを着ていて、フードをかぶっている。突如として現れたその人物に俺は明らかに警戒心を抱いてしまっていた。

嫌な予感しかしない。

衝突

「誰だ、お前は。」
「まさかとは思ったけどこんな端まできてみて正解だったわね。」
凛とした声。すごみというものがどんなものかが理解できた。そいつはフードをとった。面のようなものをしている。声でわかる。女だ。
「さあ、はやく返しなさい！いまさら抵抗は無駄というものよ。」
「ちょっと待ってくれ！何のことをいっているんだよ？意味がまったくわからない。いったい何を返せって・・・」
「とぼけるつもり？わかるわよ。ちゃんとお前のその上着のポケットにそれがはいっていることもね。」
ポケットの中？いったい何がはいっているというのだ。俺はおそるおそるポケットに手を入れる。ひんやりとした感覚。記憶がフラッシュバックのように脳をはしった。駅前の階段。ちいさなもの。それは、昨日拾ったあの金属板だった。まさかこれか・・・？
「これのことなのか？これの持ち主だっていうなら・・・」
俺は最後まで言えなかった。あんなに遠くにいたはずのその女がなにか短刀のようなものをもって跳んできたのだ。
「のわっ！」
俺は横っ飛びで地面に転んだ。なんていうスピードだ。服のかたのところの切れ目が刃物の鋭さを物語っていた。
「お前のせいでいったいどれだけの仲間が・・・！」
「なんのことだ。違う！勘違いだ！俺はただ道端で拾っただけだ！」
「フンッもう少しまともなうそは思いつかないの？お前がどういうつもりかは知らないが、私はだませない。今返すって言うなら、命ぐらいはそのままにしてやるわ。」
おお、最初からそういえばいいのに、これの持ち主だっていうのなら返さない理由はないし、こんな危ないやつにこれ以上付き合えな

い。
「返すよ。ほら、・・・」
あれ？渡しにいこうとしたときまたもや異変がおきた。動きたいのに体が動かない。金縛りの現実版といった感じだ。なんだ？今度はなにが起きているんだよ？
「どうしたのよ。はやくしなさいよ。」
「いや、まってくれ。そうしたいんだけど、体が動かない。」
「はあ？お前、おかしいのか？馬鹿は嫌いだ。いい加減に・・・ん？」
なにか頭の横に手を当て始めた。いったい何をしているんだ？
「なんてこと・・・お前、本当にこの時間軸上の人間か？」
「え、なんだって？今度はなにをいってるんだよ。」
「私じゃ、あの空間シールドは破れない・・・。」
女が急に短刀をかまえはじめた。
「ちょっま、まった。やめろ。何をする気だよ！？」
「一点に力を集中させて、維持力低下をねらいそこから活路をひらく！！！はあああああああああ！！！」
女が走ってくる。じょじょに短刀が先端から赤みをおびはじめている。
「ややめろ！！！！！！！！！！！」
目をつむるのと同時に風圧のようなものを感じ、それから弾かれるような衝撃。
「うあああああああ！！！！！！！」
ここで死ぬのか？音が聞こえない。目のまえが真っ暗だ。どうなった？俺は、俺は・・・そのときだった。かろうじで開いていた目にまぶしすぎるぐらいの光がはいってきた。
「な、なんで・・・・！」
あの女の声がする。もうなにもわからない。俺の意識はどんどん遠のいていった。

対話

頭の後ろのほうに冷たい感覚。俺は地面に寝ていた。
ばっ、瞬時に起き上がる。
あれ、確か俺は・・・。目が慣れてくると今が夜だということがわかった。
「ここはいったい・・・どこなんだ・・・？」
「すまなかった。」
なっ！？きゅうに横に人影が現れた。でかいフードつきの黒いコート。記憶がもどる。さっきの女だった。今度は、面をしていない。
「な、なんだよ！？まだ俺に何か用かよ！？」
「まずは、謝る。それが礼儀だ。すまなかった。」
「え・・・ああ、いや・・・その・・」
さっきの気迫に満ちた声とは裏腹に小さなこえで別人のようだった。なんだか気が落ち着いてきた。
「お前の言っていたことは、うそではなかった。お前はそれを何も知らずに手にしているだけ。気づかなかった。」
俺はまだ左手で、まだあの金属板をもっていた。
「いや、そんなことはもういいから・・・、ほら、返すよ。」
「受け取れない。」
「え、なんでだよ？これの落とし主なんだろ？」
「似ているけど、少し違う。受け取れないのは、それがそれを望まないから。」
「望まない・・・？何をいっているんだ？まるで生き物みたいに」
そういうと女が手を伸ばしてきた。女の手が左手にある金属板に触れる。そのときだった。そのことを拒むかのようにバチバチッと火花のようなものがでた。
「おわっ！？」
「わかったでしょ？私ではそれを手にすることはできない。」

「何なんだよ一体？この金属板はなんなんだよ？」
「説明しようとすると、理解しにくいところが多くなるかもしれないわ。もちろん、最大限簡略化するけど。それでも聞きたい？。」
そんな難しい説明が必要なようなものなのだろうか。でもなにも知らずにこんな物を持っているのはさすがにどれだけ危ないか想像できたものじゃない。
「お願いするよ。」
俺はうなずいた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0063h/

一枚の奇跡

2010年10月28日01時51分発行